

設立記念シンポジウム

大野氏「地球を冷やすには、われわれが熱く」

自由な建築デザインを損なわない新しい建材一体型太陽電池の開発をマネジメントすることを目的に発足した「太陽エネルギーデザイン研究会」(会長・伊澤岬日大理工学部教授)の設立記念シンポジウムが6月下旬、東京・元赤坂の松田平田設計で開かれた。大野二郎氏(日本太陽エネルギー学会理事、日本設計環境創造マネジメントセンター「CEDeMa」長)と伊澤氏が講演を行い、太陽エネルギー利用の重要性や可能性を説いた。



大野氏

「長期的には建築の二酸化炭素(CO₂)削減ポテンシャルは大きい。低炭素社会の構築に向けて建築界が世界の温暖化対策をリードしなければいけない」と主張し、「地球を冷やすためには、われわれが熱くなる必要がある」と呼び掛けた。デザインの視点から太陽光発電を考

「ソーラー建築デザインのススメをテーマに講演した大野氏は、海外や日本の環境政策の動向を紹介した上で、「近代建築はエネルギーの流れや関係性をデザインせず、エネルギーを大量消費している。建築と設備の融合が重要であり、空間を律する設備デザイン

」が出現してほしいと強調。国内外のソーラー建築の事例を紹介しながら、建築外皮がエネルギーを生み出すというファサードエンジニアリングの重要性を指摘し、「太陽エネルギーの利用は不可欠だ。技術に裏打ちされた意味ある美しい環境建築デザインが求められている」と力を込めた。



伊澤氏

えるという伊澤氏。現状の太陽電池について「建築を対象に『置く』『張る』という技術になっている。屋根に置くことで防水問題も生じている」と指摘し、次のステップとして「イメージ的な言い方になるが、『流し込む』『織り込む』『包み込む』の技術が求められてくる」との見解を示した。新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)などが開発しているシリコン材料による薄型・軽量・高機能な太陽電池を用いてアイデアをまとめた横浜ソーラーパーク計画2009」について伊澤氏は、「(太陽電池を)都市インフラまでもを対象に『組み立てる』というイメージで計画を展開した。ソーラーシステムのほか、森づくりや

交通システムによるCO₂抑制効果を合計すると、横浜市民1600人、365日分のカーボンオフセットが達成できる」と述べた。

伊澤氏は「流し込む」「織り込む」「包み込む」という手法が世界遺産のユニバーサルデザイン(UD)化にも有効だと解説。「この三つの手法を太陽光エネルギーの技術に展開していきたい。こうした日本の技術を国際スタンダード化し、世界に売り込めるものにしていくことが大切だ」と強調した。

伊澤氏「日本技術を国際標準化し世界に売り込む」

同研究会は9月1日に1回目の研究会を開き、斎藤公男日大名誉教授(同研究会顧問)が特別講演するほか、杉本賢司タイセイ総合研究所上席研究員が会員報告を行う。会場や時間などは未定。